未解決問題に向き合う姿勢

――新たな視点を得る必要性――

薛　小凡

言語とジェンダーの研究は、幕開けとなるレイコフ、そして早期に日本語とジェンダーの知見に貢献した壽岳、さらにパフォーマティヴィティの概念を導入したバトラー以降、現在に至るまで、さまざまな分野で展開されてきた。では、これまでどのような「研究成果」と呼べるものが生み出されたのであろうか。

ここで、一体、何が「成果」と呼ばれるのか。先の世代の研究者は今後どのような「成果」を期待しているのであろうか。社会的実践に与えた影響を指すのであろうか。言語の問題では、「奥さん・様」「ご主人さん・様」のような言語表現の形式が変わらない、若しくは消えない限り、成果がないということであろうか。そうすると、「女・女性」、「男・男性」ということばはどうとらえたらよいであろうか。

「男女共同参画社会」が公布されて 3 年後の 2002 年に、男性看護師の増加が切望されたため、法律によって「看護婦」という性別役割分業から生まれた女性の職業は正式に「看護師」に改められた。また、近年、都市化・核家族化・少子高齢化、また通信技術の進歩によるコミュニケーションの様態の変化に伴い、言語表現におけるジェンダー差は公式な場面や若者の間などで縮小しているという指摘もよくある。

言い換えれば、言語使用の様態の変化は、背景を成す社会的文脈の変化の反映であるだけではなく、社会変化そのものである可能性も孕む（Cameron 1990: 90）。つまり、社会構造の変化にしたがって言語が変わっていく。その逆に、言語はジェンダーを表現し、構築する力をもつ。差別のない言語は、社会的・文化的差別をなくす力をもつであろう。ジェンダー差のない言語表

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

現の形式を強調したり、特定の場面や状況において意識的に言葉遣いに配慮したりすることはジェンダー平等にたどり着くための一つの手段である（薛 2021：103）。

念頭に置くべきは「言語は生きている」ということである。中井（1973：253）は以下のように述べた。「フンボルトは、言葉はエルゴン（創られたるもの）ではなくして、エネルゲイヤ（創るちから）であると云う。ほんとうに言葉は生きているように思われる。と云うか、同じ言葉を十年くらいで、もう、ほかの意味に取違えてしまう。それほど言葉は生きて動いている」。

ここで浮上してくるのは言語表現の形式には限界があるということである。アイデンティティ創造という視点から、規範から逸脱したことばを使用したり、再定義したりすることばの不足を超越した創造的な行為（中村 2021：72-103）において、言語使用や意味の変容は言語とジェンダーの研究では無視できないものである。性的マイノリティの事例においても、聞き手である他者によって社会的に構築される自己との狭間に葛藤を抱える可能性が大きいが、発話者は選択・再定義・使用するジェンダー表現を通して自己のセクシュアリティを構築していく（薛・青野 2020：222）。

そして、先行研究を「追試」する意義を主張したい。新たな文脈の中に、古くから指摘され、議論されてきた問題、つまり未解決問題が現在どうなっているのか、改めて繰り返し検討することが必要である。

なお、多面的に言語とジェンダーの問題を捉える必要もある。言語とジェンダーに関する従来の研究は、女性・男性を表すのに使われる言語表現の研究と女性・男性が使う言語の研究が別個に展開してきた。「言語とジェンダー」研究においても、「誰が、いつ、誰に対して、どのような場面で、何を、どのように話す際に用いているのか」を明らかにしていくことが重要であり、ただ「ジェンダー」という枠組みからのみ、言語と社会を捉えてしまうという陥穽に陥ることのないよう、改めて自覚する必要がある（宇佐美 2006：34）。言語に影響を与える年齢・文化・人種・階層など様々な要因を無視してはいけない。

ここで、２点を強調しておこう。先の世代の指導者・研究者には、若い世代に、「過去」の研究の成果を継承したうえで、「現在」を分析する視点を提

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

供し、「未来」を見据えた研究に進むよう指針を示してほしい。若い世代の学生・研究者には、足元（「現在」）しか見ない研究に終始しないようにお願いしたい。学位を取ることや、業績を稼ぐという目的ではなく、先達から「過去」を学び、より先のこと（「未来」）を見ながら、積極的に創造し、チャレンジしよう。

［引用文献］

CAMERON, Deborah（1990）Demythologizing sociolinguistics: Why language does not reflect society, in,Joseph, J, E. and Taylor, T, J.（eds.）*Ideologies of Language*, Routledge, London, 79-93.

中村桃子（2021）『「自分らしさ」と日本語』筑摩書房.

中井正一（1973）言語は生きている，中井正一（著）鈴木正（編）『美学的空間』新泉社，253-261.

宇佐美まゆみ（2006）ジェンダーとポライトネス ── 女性は男性よりポライトなのか ──，日本語ジェンダー学会（編）『日本語とジェンダー』ひつじ書房，21-37.

薛小凡・青野篤子（2020）「性的マイノリティ」の語りにおける言語表現，ジェンダー，セクシュアリティ ── テーマ分析を用いて ──『人間文化創成科学論叢』（22），215-223.

薛小凡（2021）性を超えようとする人たち ── マイノリティと呼ばれて心理科学研究会ジェンダー部会（編）『女性の生きづらさとジェンダー』有斐閣，95-122.

（せつ　しょうはん・お茶の水女子大学博士後期課程）

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.